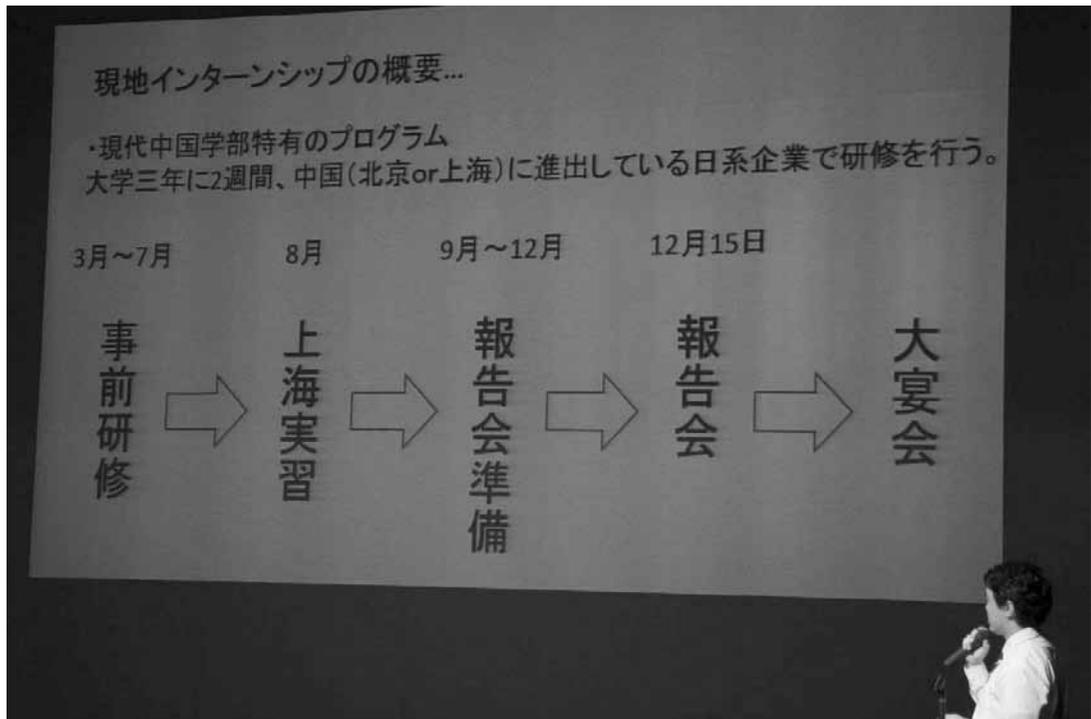


【講演記録】

学生が見た上海 —中国現地インターンシップを通して—

愛知大学現代中国学部 4年生 岡本 大空

(2018年7月1日、岡崎市図書館交流プラザ Libra ホール)



現代中国学部4年生の岡本大空と申します。本日は、よろしくお願ひします。

私は、去年の8月の2週間、上海へ現地インターンシップに行きました。今日は、その時の上海で体験したことをお話しさせていただきます。

最初に私のプロフィールを紹介します。岡本大空です。名は「おおぞら」と書いて「そら」と読みます。1996年生まれの22歳です。今は大学4年、卒論を書かなければいけないので大変です。出身は愛知県の一宮市です。小学校、中学校と軟式野球をやり、高校は陸上部でした。大学ではボランティア部に入っていました。趣味は、料理と中国旅行、それとキャップを集めることです。

今日は、インターンシップについて、最初に概要を、次にそこで気付いたこと、最後にまとめるという順に進めていきます。

まず、現地インターンシップの概要をお話しさせていただきます。これは現代中国学部特有のプログラムで、大学3年生の時に2週間、北京と上海に進出している日系企業で研修を行うというものです。

実習に入る前に研修を受けます。社会人としてのマナー、例えば名刺交換やメールのやりとりの仕方を教えてもらいます。それから、上海で2週間の実習をしました。

その報告会が12月にあります。100人ぐらいの方に来ていただくので、みんなで協力して準備をし、何回もリハーサルをしてやり遂

げました。その後の大宴会が現地インターンシップの醍醐味です。お客さんや先生方をお招きして一緒に楽しむのです。

今年の研修期間は8月2日から16日まででした。ぼくの研修先はオーエスジー様でした。豊川に本社がある工業用刃物のメーカーです。中国語では「欧士机」(Ōushiji)というのですが、そこで研修をさせていただきました。上海のオフィスでの研修内容というのは、基本は営業に同行することで、資料作りもしました。

次は研修中に気付いたこととお話ししていきます。

私が最初に気付いたのは、中国人と日本人は生活も何もかもまったく違うということです。例えば、ジェスチャーというか、手を振って謙遜するとか、そういうことを中国人はしません。謙遜する時に、女性が顔を隠すことはありますが、男性はまずしません。ほかにも開けた扉を次に通る人のために手で支えるということもありません。

そうした中に、日本人っぽい中国人がいるということをお話ししていきたいと思います。一番印象に残っているのは、そうした日本人のような中国人というのは確認を怠らないということです。

私は日本と中国のビジネスに関するゼミナールをとっているのですが、中国とビジネスを進める際には、中国側の確認不足によるミスがあることを学んでいました。先ほどの野口さんのお話にも出てきたようなトラブルがあるということです。

そのように勉強していたので、現地インターンシップに参加して、日本人のような中国人に接したときには、ものすごくギャップを感じました。私のことを担当してくれた中国の方はとてもしっかりされていて、スーツをびしっと着こなし、仕事の確認を怠ることなどありませんでした。日本人の上司の方は、彼のことを現地採用の中国人とは違って、とてもしっかりしていると高く評価していま

た。どうして中国人なのに日本人のようなのかというと、彼に営業の仕事を教えたのが日本人だったからです。

日本人のような中国人はもう1人いました。この方は、日本に2年ほど留学したことがあるそうです。その2年の間に日本の文化をしっかりと理解して、それが仕事を進めるに際して確認を怠らないというところまでつながっているというのは、すごいことだと思いました。

日本人の上司と中国人の現地採用社員が衝突することがあるのですが、きちんと中国人に説明や教育をしていないという日本側にも問題があるのかもしれませんが。しっかりと日本のことを伝えていないから、日本のやり方を分かってもらえないのです。しっかりと教育することで、中国はこうするところを、日本ではこのようにするのだとお互いに認識することが大事なのだと思います。

中国は、日本よりもレスポンスの速さが求められます。取引先に出向いて商品を売り込む時もそうです。もちろん、日本でもレスポンスの速さは要求されるのですが、中国ではその速さが桁違いなのです。上海のオーエスジーにいた日本人の方が、中国の意志決定の速さは日本の比ではないとおっしゃっていました。例えば、非正規製品の商談をしていて、「私では製品の細かいことについて分からないので、一度、社に持ち帰り検討させていただきます」

と先延ばしにすると、その時点でだめになってしまいうということもあるそうです。その辺りをしっかりと理解することが大事なのです。その場で臨機応変に対応してビジネスチャンスを逃さないというのが中国のやり方だと思うので、現地インターンシップで、そこを理解できたことがよかったです。将来、ぼくは中国で働きたいので、ものすごく勉強になりました。

続いて中国での生活について気付いたこととお話しします。

今、中国、特に上海でとても流行っている飲み物があります。紅茶にクリームチーズを入れたドリンクです。これがとてもおいしい。人気が出すぎて、これを買うのに2時間ぐらい並ぶことがあるほどです。上海に行かれたら、ぜひ、試してみてください。

グルメに関することでは、日本で焼きショーロンポーと呼んでいるものも人気があります。普通のショーロンポーより皮が厚く、まるでパンのような生地です。焼き肉まんといった方がイメージしやすいでしょうか。おいしいのですが、そのまま口に入れたら絶対にやけどしてしまいますから、必ず割って肉汁を出してから食べた方がよいです。

観光スポットでは、みなさんもご存じの外灘があります。浦東の高層ビル群も壮観ですが、租界時代の重厚な建物が300メートルほど立ち並ぶ様子は荘厳です。

ほかには田子坊という路地があります。迷路のような街におしゃれなカフェやレストラン、雑貨屋が並んでいます。今風にいえば、「インスタ映え」する場所です。

観光といえば、上海にはディズニーランドがあります。しかし、これはかなり汚いです。東京ディズニーランドに行ったことがある方は、その汚さにショックを受けてしまうのではないのでしょうか。パレードが終わった後などゴミが散乱してひどいものでした。これは上海の人というより、田舎から出てきたマナーを知らない人に原因があるようです。

日常生活で気付いたことには、シェア産業に関することがあります。中国はシェア自転車に代表されるシェア産業というのが盛んになってきています。日本にも進出し始めているので目が離せないものです。シェア自転車の次に出てきたのが、シェア傘です。駅構内に設置されていて、スマホに専用アプリを入れ、それでQRコードを読み取って傘を使うのです。料金は1元とか2元とかです。24時間以内に返却しないと買い取りということになってしまいます。



このシェア産業などはその典型といえるのですが、中国で生活をしていて痛感するのは、電子決済が広く普及しているということです。屋台でも電子決済できてしまうことには驚かされました。

生活上でほかに印象に残ったことは、地下鉄があります。行かれたことがある方はご存じだと思いますが、中国では地下鉄に乗る時にも手荷物検査があります。ただ、上海では形骸化しており、検査機がほとんど使われていない状態です。検査する人は警察官ではありませんから、

「荷物を置いてください、検査します」

と呼びかけても、乗客は無視して素通りして行ってしまうのです。このように上海ではもう意味がない感じになっているのですが、南京に行った友人の話では、まだしっかり検査をしているそうですから、地域によってかなり違うのでしょうか。私は、上海の状態の方が進んでいるようにと思えました。

もう一つ驚かされたことがあります。中国というのは、外食した時、ゲストの立場の人が料理を食べ残すという習慣があります。ゲストはお皿に料理を少し残し、それによって食べきれないほどご馳走していただいたという感謝の気持ちをホストに表すのです。もし、料理を平らげてしまうと、まだ満腹ではない、もっと食べたいという意志表示になってしまいます。そういう習慣があるはずなのに、上海の地元の小さな料理屋さん入ったら、壁に「食べる分だけ注文しましょう」と書かれた

掲示があったのです。そこには「食べ残しはやめましょう。余ったものは持ち帰りましょう」とも書いてありました。今でも中国では食事を残す方が普通なのですが、上海の人たちはそうした習慣を変えようとしているのです。これには本当に驚きました。

そろそろ、まとめに入りたいと思います。

ビジネスでは、日本流の働き方を理解し、確認を怠らない仕事をする中国人がいました。日本人っぽい中国人です。それに中国現地スタッフの中国流のレスポンスの速さを合わせることによって、日本企業は独自のビジネスを中国で展開できるのではないかと考えています。

生活面では、中国独自のルールや習慣がグローバル化していくことによって、中国自体が世界をけん引していく力を強めていくのではないかと感じています。

だから、中国からは一時も目が離せない。それが、私の今日のまとめです。

これで今日の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

質問：中国のグローバル化とおっしゃいましたが、これは逆のいい方をすると、世界の方が中国化されているということではないでしょうか。世界を中国化するという意識が中国人にはあると私は思うのですが、その辺りはどのようにお考えでしょうか。

岡本：私が接してきた中国人は、同世代や若い方が多かったのですが、彼らには世界を中国化しようというような雰囲気はありませんでした。少なくとも、私にはそのようには見えませんでした。

彼らは皆、海外に興味を持っていて、日本人だけではなく、いろいろな国の人と交流してがっていました。営業同行の時も、欧米の企業の方とのお付き合いがありましたが、中国人スタッフはとても友好的に接していました。

もちろん、中国がグローバル化するといっても、伝統の中で根付いている習慣がありますし、きちんとした教育を受けられない人も多いですから、一朝一夕というわけにはいかないと思います。ただ、たしかにそういう方向にあると思いました。